



Title	吐魯番出土文物研究会会報 第26号 : 特集・古城址一覽(Ⅰ)
Author(s)	
Citation	吐魯番出土文物研究会会報. 1989, 26, p. 1-6
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/78836
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

吐魯番出土文物研究会会報

1989年12月1日

吐魯番出土文物研究会

第26号

特集・古城址一覧(I)

新疆維吾爾自治区古代城址一覧表(I)

—黄文弼氏の調査報告を中心にして—

荒川正晴 編

【はじめに】

麴氏高昌国の都城・高昌城（カラホージャ）の規模について、『隋書』巻83西域伝高昌の条は「其の都城は、周廻一千八百四十歩」と伝えている。この記事は、当時の高昌城の規模を推定する際に拠るべき唯一の貴重な文献史料となっている。既に同条を分析されている嶋崎昌氏は¹⁾、この記事に関して、黄文弼氏の調査による実際の高昌城址の周囲の規模が、およそ10里（中国里、5km）である²⁾ことから、「一千八百四十歩といえば、六里余りに当る³⁾から、隋時の高昌城はなお大分小さかったらしい」と推測されておられる⁴⁾。さらに氏は、同じく黄文弼氏が、旧址には大城の中に子城（中心部の城砦）のあった跡が見られると報告していることを挙げられ⁵⁾、「隋の高昌城は大城のできる以前のものであったろうか」と注されている⁶⁾。

これに対して閻文儒氏は、高昌城を外城・内城（外城の中間、宮城の南面に位置する。黄文弼氏の指摘される子城に相当するか？）・宮城の三区域に分けて説明される⁷⁾。氏が論文に掲載する故城平面図によれば⁸⁾、内城は3500m前後あり、『隋書』に伝える都城周囲の数値と近いものとなる。内・外城ともに方形を成しているが、外城は四面とも弧線を描き、西北の角が内側に凹み、東面北半部が外に向って突出している。外城壁は、土をつき固めて築かれており（版築、版層の厚さ8-12cm）、厚さは約12m前後、残存部分の高さ（最高）は11.5mに達する。また馬面（敵台・楼台）や城門（西壁2門＜北側の門は甕城を具える＞・北、東壁各2門・南壁3門）を具えている⁹⁾。閻文儒氏は、こうした馬面や甕城が外城に存在することや、宮城内の遺址の版層が比較的厚く、また城中の小堡塁内の建築物と寺院遺址がすべて日乾煉瓦で造られている建築の特徴が、唐あるいは唐以後の天山以南各地の建築のそれと通ずるものとされ、さらに『西州図経』（P.2009）に「聖人塔、在子城東北角」とあり¹⁰⁾、唐代西州城には既に子城があったと推測されることから、外城が西州時代に築かれたと推定されている¹¹⁾。

これら両氏の見解に拠るならば、隋代には周囲3000m台の規模であった高昌都城が、唐の西州時代には、それを囲む外城が構築されたということになる。同時に現時点では、外城が高昌国時代にすでに存在していた可能性も十分考えられる¹²⁾ので、今後の本格的な考古調査に期待する部分は少ない。ただ嶋崎・閻両氏の推測がもし認められるとするならば、当然のことながらこの高昌城の拡張は、640年に始まる唐の西州経営と深く関連する。唐は、この地に西州を設置すると同時に安西都護府を置き、トウルフアンは鎮守軍兵が駐屯する前線基地となった。加えて、「在京及び諸州の死罪の囚徒を西州に配して戸となす」（『旧唐書』巻3太宗紀貞観16年<642>正月条）など、まさに「高昌旧民は鎮兵及び謫徙者と西州に雑居す」（『資治通鑑』巻196貞観16年<642>9月条）る状態となったのであ

る。安西都護府は、高昌城西方の交河城に置かれていたごとくであるが、後に天山軍（管兵五千人、馬五百匹）が西州城内に設置されており¹³⁾、言うまでもなく高昌城内にも多くの兵員が駐屯していたと思われる。西州期における一般戸口の増大¹⁴⁾とともに、これらのことは高昌城拡張を促す要因となったものと思われる。

ところでトゥルファンには、西州時期、この高昌城のほかに20余りの城邑が散在していたと思われる¹⁵⁾が、これらは西州下に県（高昌・交河・柳中・蒲昌・天山県）・郷（24郷）¹⁶⁾としてほぼ組み入れられていった（郷が設置されない城邑も当然ある）と考えられる。これらの城邑のいくつかは、既に調査されているが、いま試みにその規模を列挙してみるならば以下のごとくである。（a）は現在名／現在地、（b）は城址に関する情報・データ、（c）は麴氏高昌国、西州時期における郡・県・郷の設置を列挙した（拙稿「麴氏高昌国における郡県制の性格をめぐって――主としてトゥルファン出土資料による――」＜『史学雑誌』95-3、1986年＞p. 40参照）。

(1) 交河古城

- (a) Yār-khoto（雅尔湖）／吐魯番県の西約10km
- (b) 東西約300m（最広部分）・南北約1000m、橢円形（崖上に位置し城壁なし）
南端と東側に城門あり（東門の広さ約5m）¹⁷⁾
- (c) 麴氏高昌国交河郡／西州交河県治

(2) 安楽古城

- (a) Yangī-shahr（英沙古城）／吐魯番県の東約2km
- (b) 東西の残長約200m余り、不規則形（西・西北・西南の三面が崖に臨む）
版築、南壁の残高2-3m、下部の版層約10cm前後・中部約20cm前後、南側に
城門・甕城あり（北庭故城北門と形式は同じ）〔東・西門の存在?〕、馬
面（敵台）なし¹⁸⁾
- (c) 麴氏高昌国安楽県／西州交河県安楽郷

(3) 南平古城

- (a) Lampu（讓布工尕）／吐魯番県の南約15km
- (b) 東西約400m・南北約430m、方形¹⁹⁾
- (c) 麴氏高昌国南平郡／西州天山県南平郷

(4) 無半古城

- (a) Bögen-tura（闊坦图尔・布干土拉）／吐魯番県の西約20km
- (b) 東西約176m・南北約150m、方形、日乾煉瓦づくり、西側の城壁の残高約1.5
m・厚さ約3m、護城河あり、東壁中央に城門（広さ約5.5m）²⁰⁾
- (c) 麴氏高昌国無半県／西州天山県管内?

この他、軍事施設としての戍・鎮も多数配置されており（例えば赤亭戍・鎮の遺址と推測される七克台郷古城は、鄯善県七克台郷の東南約5kmにある丘陵の東端に位置し、長方形で東西約28m、面積約252㎡の規模をもつことが知られる²¹⁾）、トゥルファンの古城址は今後あらためて詳細に考察していかねばならないと思われる。幸い白須浄眞氏により、トゥルファンの諸遺跡の詳しい紹介がなされるので、ここではこれらの城址を検討する基礎作業の一端として、その規模を他の地域のものと比較してみたいと思う。唐の中央アジア進出は、トゥルファン地域に限られず、ターリム盆地周辺の焉耆・龜茲・疏勒・于闐および天山以北の北庭地域にも及んでおり、西州時代のトゥルファンの城址の検討を進めていく上で、同様に唐の征服と支配を蒙ったこれら周辺地域の城址との比較は不可欠のもの

となろう。

そこで、まずは黄文弼氏の二つの報告（『考古記』・『報告』）に限定して、上記地域に散在する同時代の故城址の情報（主として城址規模に限定）の整理を試みてみた。本号および次号は、亀茲城址周辺地域を取り扱うこととする。『考古記』は、黄文弼氏が、ターリム盆地周辺を1928～29年に調査した折の、また『報告』は1957～58年の踏査に基づく同地域に関する報告書である。城址の年代や性格（形態や建築の特徴および城址としての機能など）、およびその古城名への比定は、他に参照すべき調査報告や編纂史料および先学の諸論文が山積しており、一つ一つの城址について詳細な検討が必要となるので、ここでは取りあえず調査を担当された黄文弼氏の推定に基づいた。列挙にあたっては、広く参考に供するため唐代の城址だけでなく漢代に遡ると氏が推測されたものをも対象として、軍事的な遺構を含む諸城址を掲載した。ただし宗教的遺構と認められるものは、ここでは除外した。なお城址の平面図は、地域ごとに各表の後に付すこととする。本表作成にあたっては、本研究会メンバーの關尾史郎・白須淨眞両氏に種々ご助言を賜わった。ここに記して謝意を表したい。

【注】

- 1) 嶋崎昌「『隋書』高昌傳解説」『隋唐時代の東トウルキスタン研究』東京大学出版会、1977年、pp. 311-340。
- 2) 黄文弼『吐魯番考古記』（中国科学院、1954年）p. 4。
- 3) 隋・唐時期を考えると、1歩は隋で6尺・唐で5尺、1尺は隋で29.51cm（開皇官尺）・唐で31.1cm程である。呉承洛『中国度量衡史』（上海書店、1984年）pp. 54-76, 182-251参照。従って、1840歩は、隋制では3257.9m、唐制では2861.2mとなる。何れにしても、嶋崎昌氏の指摘されたように、現状の高昌城址の規模には遙かに及ばない。因みにアスターナ古墳群の墳墓より発見された唐代の木尺は、29cm代のものが多い（①長29cm、幅2.8cm、厚1.3cm 66TAM44出土＜永徽6年（655）宋懷憲墓＞ ②長29.3cm、幅2cm、厚0.9cm 73TAM191出土＜永隆元年～2年（680-1）文書および文明元年（684）庸調麻布の伴出＞ ③長29.5cm、幅1.7cm、厚0.9cm 73TAM191出土。国家計量総局・中国歴史博物館・故宮博物院主編『中国古代度量衡図集』＜文物出版社、1984年＞pp. 22-25）。
- 4) 嶋崎昌、前掲論文、p. 325。
- 5) 黄文弼、前掲書、p. 4。
- 6) 嶋崎昌、前掲論文、p. 337, 注(19)。
- 7) 閻文儒「吐魯番的高昌故城」『文物』1962年第7・8期、pp. 28-32（『三十年』pp. 136-41）。
- 8) 閻文儒、前掲論文、p. 29, 図1「高昌故城平面図」。
- 9) 閻文儒、前掲論文、p. 28-30。白須淨眞氏から、甕城が西壁のほか東壁の北側の門にも存在していたことをご指摘頂いた。なお高昌城の城門については、鄭炳林「高昌城諸門考」『蘭州大学学报』1985年第4期、pp. 25-32に詳しく検討されている。
- 10) 原文では、「古塔五區。聖人塔一區。右在州子城外東北角。」とある。唐耕耦・陸宏基編『敦煌社会經濟文献真蹟積録』第一輯（書目文獻出版社、1986年）pp. 54-5。
- 11) 閻文儒、前掲論文、p. 30。
- 12) 白須淨眞氏は、現地調査を踏まえ、麴氏高昌国時代に既に外城が存在していたと推定されている。詳しくは、専論を待ちたい。
- 13) 『元和郡県図志』巻40に「天山軍、西州城内。開元二年置。管兵五千人、馬五百匹」とある。
- 14) もちろん一般の戸口数についても、飛躍のとは言い難いが高昌国滅亡後の西州時期において増大している。トウルフアン地域全体にわたるものであるが、高昌国滅亡時に「戸八、〇四六・口三七

,七三八」(『唐会要』巻95)であった戸口数が、一世紀後の西州時代開元年間時に「戸一一,六四七」(『元和郡県志』巻40)、天宝年間時には「戸一一,一九三・口五〇,三一四」(『通典』巻174)「戸九,一一六・口四九,四七六」(『旧唐書』巻40)となっている。

- 15) 拙稿「麹氏高昌国における郡県制の性格をめぐる-主としてトウルファン出土資料による-」(『史学雑誌』95-3,1986年) pp.38-41参照。
- 16) 24郷としたのは、『元和郡県志』巻40による。『太平寰宇記』巻156参照。
- 17) 黄文弼、前掲書、pp.7-9, 付図二。
- 18) 李徵「安楽城考」(『中国史研究』1986-1) p.156。ただし、この英沙古城(Yangī-shahr)については、佐口透『新疆民族史研究』(吉川弘文館、1986年) pp.198-223参照。同書に引用されるMannerheimの報告によると、当城は「各辺が540m、東門・西門・南門があり、城壁の高さは6.4m〔3.5mともいう〕であり、甕城・櫓があり、城壁に沿って、幅と深さがそれぞれ3.66mの濠が設けられてあった」とある。
- 19) 黄文弼、前掲書、p.11, 付図三。嶋崎昌「高昌国の城邑について」(『隋唐時代の東トウルキスタン研究』東京大学出版会、1977年) pp.133-4,145-6注(92)参照。
- 20) 新疆维吾尔自治区文物普查辦公室・吐魯番地区文物普查隊「吐魯番地区文物普查資料」(『新疆文物』1988-3) pp.44-5。嶋崎昌、前掲論文、p.133。
- 21) 新疆维吾尔自治区文物普查辦公室・吐魯番地区文物普查隊、前掲論文、pp.52-4。

【凡例】

- (a).....別表記・別名／現在地(ただし、正確な位置が不詳なものもある)。
- (b).....『考古記』・『報告』に載せられる城址に関する情報・データ。
- (c).....遺跡の年代および性格に関する黄文弼氏の推定。

なお地名表記については、基本的に『考古記』・『報告』および A. Stein, Innermost Asia, vol.4(Maps), London, 1928. (Rep. New delhi, 1981); S. Hedin, Central Asia Atlas, Stockholm 1966. などに依拠した。

【略称】

- 『考古記』.....黄文弼『塔里木盆地考古記』科学出版社、1958年。
『報告』.....黄文弼『新疆考古発掘報告(1957-1958)』文物出版社、1983年。
『三十年』.....新疆社会科学院考古研究所編『新疆考古三十年』新疆人民出版社、1983年。
『詞典』.....中国国家文物事業管理局編『中国名勝詞典』上海辞書出版社、1981年(鈴木博訳・村松伸解説『中国名勝旧跡事典』第5巻<西北・西南篇>ペリかん社、1989年)。

【南疆—亀茲(クチャ)地域・I】

- (1) 亀茲古城
 - (a)Kucha、皮朗古城／庫車県城の東郊
 - (b)周囲約7 km
北壁2075m(版築、版層の厚さ6-12cm、城壁の残高3.8m・幅8-16m、馬面<敵台>なし)
東壁1608m¹⁾(版築、版層の厚さ20-30cm、城壁の残高7.6m・幅15m、40m毎に馬面あり<長さ・幅とも4.8m>、土質・構築方式は北壁と相違する)

南壁1809m（版築、版層の厚さ15cm、城壁の残高3.5m・幅2.8m、土質は北壁と同じ）

西壁は残存せず

（『考古記』 pp. 30-1, 137, 注(6)・『報告』 pp. 54-61・『三十年』 pp. 54-8）

(c)亀茲国の延城（漢代）、伊羅盧城（唐代）、唐代の安西都護府治²⁾

(2) 明田阿達城

(a)Ming-tan-ata／庫車県城の東北約7 km

(b)＜内城＞東西150m・南北72m、長方形、版築、城壁の残高約1m・幅1-2m

＜外城＞北壁(残長)240m・東壁(残長)1825m＜南・西壁は残存せず＞、城壁の残高1-2m前後、城壁の基部(残部)の幅約2m、土壌＜日乾煉瓦?＞を積み重ねて構築、北壁に城門遺址あり＜幅約16m＞、伊蘇巴什河の東側に崖に臨んで立つ（『報告』 pp. 62-7）

(c)唐代の駐兵地（『報告』 p. 65）³⁾

(3) 于什加提

(a)Üch-kat、烏什喀<哈>特、三道城／沙雅県・伯克里克村の西南約1.5km、新和県の西約35km⁴⁾

(b)＜内城＞不明

＜外城＞周囲約624m、ほぼ円形、内城と外城との間隔約60m余り⁵⁾

＜大外城＞赤土造り⁶⁾、城壁の基址の高さ約1m（ただしどの城壁を指すかは不明）、外城と大外城との間隔約240m（『考古記』 p. 19・『三十年』 p. 150）

(c)亀茲国の大城の一つ（ただし国都としては存在せず⁷⁾）

(4) 額濟勒克

(a)Hajelik／沙雅県・大望庫木の西南約5 km

(b)城壁沙中に埋没す、遺址範囲は縦横約2.5km（『考古記』 p. 20）

(c)漢代遺址（『考古記』 p. 20）

(5) 大望庫木旧城

(a)Dawān-kum／額濟勒克旧城の南約5 km

(b)城壁の残存は見られず（『考古記』 p. 20）

(6) 克子爾沁

(a)Kizil-shahr／伯勒克斯の東約15km、克子爾莊の南方に二城が並ぶ（①西側 ②東側）

(b)①周囲約330m、赤土造り、城壁の基址・高さ約2m ②周囲約600m（城壁の基址は、①よりやや高い）（『考古記』 p. 21）

(c)漢代遺址（『考古記』 p. 22）

以上(4)・(5)・(6)(大望庫木一帯の故址)は1～3世紀のもので、後漢時代の它乾城の故址（西域都護班超の掘城）と推測される（『考古記』 p. 21）⁸⁾

【注】

- 1) 『考古記』p.137、注(6)では、北壁を2000m、東壁を1446mとする。
- 2) 黄文弼「新疆考古的発見」『考古』1959年第2期、pp.78-9(『三十年』p.55)において、この城址が漢代亀茲国の都城・延城であることを指摘されるとともに、これが北魏時代には既に荒廃し、その後唐の時代に回復したと推測される。また同「略述亀茲都城問題」『文物』1962年第7・8期、pp.16-9では、より詳しくその盛衰を検討され、都城は晋の時代には既に羊達克沁大城に遷都し、再び皮朗古城が都城として復活するのは、唐の貞観年間初め以前(玄奘の来訪以前)とされる(p.19)。これに対して最近、陳世良氏は次のように都城の変遷を整理されている。①兩漢時期・皮朗古城(延城、ただし王莽末年(17年以後)～後漢永平3年(60)の時期は、于什加提く烏什喀〔哈〕特=Üch-kat／三道古城に遷都する) ②西晋末年(ないしは東晋初年、4世紀初め)ごろ～呂光の亀茲討伐(384)までの時期・庫木吐拉遺址群 ③北魏～唐貞観22(648)年までの時期・皮朗古城(亀茲城) ④唐貞観22年(648)以後の時期・皮朗古城(安西都護府治)(顯慶3年<658>以後の時期に亀茲都督府<亀茲王城>は、晋代都城旧址に遷り、伊邏廬城と呼ばれる)「亀茲都城研究」『新疆社会科学』1989年第2期、pp.116-23。
- 3) 古城内2号より漢文断片文書出土(13×3.5cm)。『報告』p.66、図版47。
- 4) ただし、黄文弼「略述亀茲都城問題」『文物』1962年第7・8期(p.18)は、南側になお版築の城壁遺址(高さ5m、厚さ5m)が残されているとされる。『詞典』(p.302)も、版築と説明する。
- 5) 武伯綸「新疆天山南路の文物調査」(『文物参考資料』1954年第10期)p.81<『三十年』p.150>には、内城(黄文弼氏の言う外城か)の規模を東西408m・南北451m・高さ4mとしている。『詞典』(p.302)は、この城址を中心城・内城・外城に分け、内城の規模については武伯綸氏と同様の数字を掲げる。ただし城壁の高さについては、残高5m・厚さ5mとする。
- 6) 黄文弼、前掲論文(p.18)では、新和県の西南18kmとし、『詞典』(p.302)は、新和県城の西方約20kmとする。
- 7) 黄文弼、前掲論文(p.18)。かつて氏は、『考古記』(p.19)において、この城址を唐以前の亀茲の故都<金花王時代の旧都>で、玄奘の伝える荒城と推定されていたが、前掲論文(p.18)でこの説を撤回された。なお前掲の陳世良氏の見解①参照。また武伯綸、前掲論文、p.81(『三十年』p.150)には、この城址において金の十字架一枚を得たという、付近の農民の話掲げる。さらに『詞典』(p.302)には、臥羊紐のある「漢婦義羌長」銅印が出土したことを挙げ、この城址を漢代における亀茲国の大都市の一つとする。陳世良、前掲論文、p.118参照。
- 8) 大望庫木(Dawān-kum)周辺の土墩・營壘として、『考古記』は次の四つを掲げる。
 - (a) ①土墩／沙雅県・大望庫木の東北約3.5-4km ②土墩／①の北 ③土墩／②の南東約1.5km
④營壘／③の西南約1km
 - (b) ①周囲約36m、土築、壁中に土壇<日乾煉瓦?>あり、高さ約6m ②周囲約30m、高さ約5m
③周囲約36m、下層・土築、上層・土壇<日乾煉瓦?>づくり、高さ約12m
④<内層>周囲約54m <外層>周囲約161m、城壁の基址・高さ1m弱(『考古記』p.20)
 - (c) ①漢墩、唐以後重修 ③漢墩、唐以後重修 ④古時の軍事中心地域 (未完)

事務局(連絡先) 〒182 東京都調布市国領町5-19-14

荒川正晴方

TEL 0424(81)4633

吐魯番出土文物研究会(The Research Society for Turfan Relics)